

- ①RPA ユーザー開発サポートは、マネジメント部（兼務なし幸田さん連携）で推進できる。
- ②兼務の理由および開発部の RPA 推進ビジョン戦略を説明いただきたい。

ICT 責任者から全社員に向け発信いただきたい DX 文化を醸成する戦略

#### 1. 共通のビジョンと価値観の共有

企業のパーパス（存在意義）を明確化：ICT 部門がどのように企業の目標達成に貢献するかを具体的に示す。  
ビジョン達成に向けたロードマップ作成：短期・中長期の目標を明確化し、全社員が目指すべき方向性を示す。

#### 2. 自立分散と協働のバランス

CoE（Center of Excellence）による支援：専門知識を持つ CoE が、非 IT 部門の市民開発をサポートし、成功事例を共有。  
クロスファンクショナルなチーム編成：IT 部門と非 IT 部門が協力し、部門間の壁を越えたイノベーションを促進。

#### 3. 市民開発の推進

市民開発ツールの導入：業務に精通した非 IT 部門が、ノーコード/ローコードツールなどを活用し、自らの課題解決に積極的に取り組める環境を提供。

開発コミュニティの形成：市民開発者同士が情報交換や協働できる場を設け、ノウハウの蓄積を促進。  
成功事例の共有：市民開発による成果を社内で広く共有し、モチベーション向上と更なる取り組みを促す。

#### 4. 変化への対応力強化

継続的な学習とスキルアップ：新しい技術やツールの導入を促進し、社員のスキルアップを支援。  
失敗を恐れずに挑戦できる文化醸成：失敗から学び、改善していくことを奨励し、イノベーションを促進。

#### 5. 中間管理職の育成

ロールモデルとなる行動：中間管理職自身が、市民開発ツールを活用し、業務改善に取り組む姿を見せる。  
ビジョンの浸透：トップのビジョンを現場に伝達し、社員の理解と共感を深める。

RPA 推進の成長戦略を、コンセプト設計、コンテンツ戦略、コミュニケーション戦略の 3 つの柱で構築する。  
この戦略を実行することで、全社 RPA 推進が加速し、業務効率化とデジタル変革の進展が期待できる。

#### ①コンセプト設計

##### ・ロールモデル選定

成果を達成した非 IT 系ハイパフォーマーのユーザー開発者をロールモデルとして選定する。

##### ・ブランディングと差別化

RPA の CoE の独自性を確立する。

例えば、「業務効率化のイノベーター」や「デジタル変革の推進者」といったポジショニングを設定し、社内での認知度を高める。

##### ・視覚的訴求

全社員にライセンス付与された PowerBI を活用して、視覚的に訴求力を高め、RPA の有効性を実証、成功事例を社内で広く共有する。

具体的な効果（時間削減、コスト削減など）を数値で提示する。

上記ロールモデルを、ランキング表示する。

#### ②コンテンツ戦略

##### ・RPA ポータルで公開

上記ロールモデルの成功事例を参考として、他部署のユーザー開発者が楽しみながら学べる教育コンテンツを拡充する。  
教育コンテンツや開発ガイド等を RPA ポータルで公開する。

RPA 業務ヒアリングシート起票により、社内の自動化ニーズや課題を把握し、RPA で解決可能な業務プロセスを特定する。

##### ・最新トレンドの収集

RPA 連携 AI を活用し、全自動で最新トレンド情報を収集・分析させる。

最新の RPA 技術トレンドも取り入れ、VM や UiPath\_Orchestrator、Studio 等インフラ環境をアップグレード整備する。

- ・効果的なタイトル

上記ツールに収集・分析させた最新トレンドを踏まえ、バズワードや感情的な言葉を含むタイトルを提案させ、全社員の理解と関心を高める。

例えば、以下のような注目を集める要素を盛り込む。

\*バズワード: 自動化、効率化、デジタルトランスフォーメーションなど

\*感情的な言葉: 楽になる、時間を有効活用、成長

\*数字: 削減 30%、短縮 2 時間

\*時間: 今すぐ、スピーディーに

### ③コミュニケーション戦略

- ・サポート体制

きめ細かい QA 対応で、迅速かつ適切にユーザー開発の疑問や懸念をサポートする。

- ・情報発信

全社員に向け全社お知らせ投稿で情報発信し、ユーザー開発者を拡大する。

- ・双方向コミュニケーション

Teams コミュニティや Viva Engage を活用し、

上記ツールに収集・分析させた最新トレンドを要約し、チャット投稿する。

ユーザーの意見や要望に直接コメント、タイムリーに共有することでユーザー間の対話を促進する。

- ・エンゲージメント向上

上記の情報発信を通じてユーザー開発者との距離を縮め、エンゲージメントを高める。